

〔博士論文概要〕

サッカー選手のパス発生に関わる身体知の構造に関するスポーツ運動学的研究

平成28年度

寺田進志

筑波大学大学院 人間総合科学研究科 3年制博士課程 コーチング学専攻

【研究の背景と目的】

サッカーにおけるパスの重要性について、大淵・成田（1976）は、サッカーはパスゲームであり、サッカーで最も重要なことはパスであるという。また、チャナディ（1994, p.322）はパス以上に試合に決定的な影響を与えるものはないという。実際に、「サッカーのゲームのほとんどは、味方へのパスに費やされている」（釜本，1995）ため、パスにはサッカーのすべてが集約されている（カー，2007）。したがって、試合に勝つために、サッカー選手はより精確にパスを発生させるための能力を向上させる必要がある。

選手に対して動きを指導する際に、指導者はあらかじめ動きのかたち（指導目標像ないし運動構造）がどのように成り立っているのかを知っている必要がある。さらに、動きのかたちを知っているだけでなく、その動きのかたちを発生（形態発生）させるために、選手にはどのような能力が必要なのか、ということが明確にされていなければならない。「どのような身体知を目標にしてその発生を促すのかという導きの糸としての構造問題」（金子，2007，p.9）が存在するのである。すなわち、指導者は「形態発生を保証する身体知にはいったいどのような固有な意味構造が存在し、どんな目標像に向かって発生が促されるべきかという問題」（金子，2007，p.9）に直面しているのである。

そこで本研究では、サッカー選手がパスを発生させるために必要な身体知の構造を明らかにすることを目的とする。

【研究の立場と方法】

本研究の目的を達成させるために、「フットボールのキネステーズ発生論が基盤に据えられ」（金子，2015，p.2）た、「スポーツの運動学」（金子，2009，p.2），すなわち「スポーツ運動学」（金子，2009，p.i）に立脚することになる。スポーツ運動学に立脚することによって、「本人がどう動こうとしているのかという感覚世界」（金子，2009，p.11）を研究対象とし、その感覚世界に入ることが可能になるからである。

身体知の構造を明らかにするためには「地平分析」(金子, 2007, pp.66-68) が有効であるといえる。地平分析では「動感深層の地平構造のもつ志向体験に問いかけ」(金子, 2007, p.247) ることになる。そして、「動感力の含意潜在態を背景に隠している地平志向構造を明るみに出すのが地平分析のねらい」になる(金子, 2007, p.261)。この地平分析はフッサールの志向的分析に依拠する(金子, 2005b, p.136) のであり、志向的分析が「常に行っている本来的な仕事は、意識の顕在性のうちに含まれている潜在性を露呈すること」なのである(フッサール, 2001, p.91)。したがって、地平分析によって〈パスができる〉、すなわちパス発生に関わる身体知を明らかにすることが可能になるのである。

【研究結果】

本論の第Ⅰ部では、サッカー選手の動感特性が明らかにされた。

サッカーの競技規則には、「ボールを蹴らなければならない」といった規則は存在しない。しかし、サッカー選手は当然のごとくボールを蹴っている。ゴール型の種目に位置づけられ、手または腕の使用が禁止されるサッカーでは、得点を取るためにボールを蹴ることが極めて有効になるからである。さらに、ボールを保持した際には、必ずボールを蹴る運動形態の発生が必要になる。したがって、サッカー選手は常にボールを蹴る運動形態を発生させる準備をしていなければならない。

しかし、試合状況は千変万化するため、選手は試合状況の変化を常を感じ取る必要がある。そのためには、状況に対して意識を向ける必要がある。意識作用と意識内容はいつも必ず一体であるため、状況に対して意識を向けると、ボールを蹴ることに意識を向けることはできなくなる。しかし、それでも選手はボールを蹴ることができる。なぜなら、ボールを蹴る動きは自動化され、いわば潜在的な意識の働きによってボールを蹴る運動形態を発生させているからである。したがって、サッカー選手の動感特性は潜在的な動感意識によって生じるボールを蹴る動感であることが明らかにされた。

第Ⅱ部では・・・・・・・・・・

第Ⅲ部では・・・・・・・・・・

第Ⅳ部では、サッカー選手の〈パスの知〉の構造が明らかにされた。

まず・・・・・・・・・・

次に、〈パスの知〉としての体感身体知における空間的的定位感能力として、ピッチ上の〈ここ〉を感じる能力、他者関係系における〈ここ〉を感じる能力、方向との関わりのなかで〈ここ〉を感じる能力、時間的的定位感能力として、〈絶対的今〉を感じる能力が明らかにされた。次に、空間的遠近感能力として、ボールとの遠近を感じる能力、他者との遠近を感じる能力、時間的遠近感能力として、好機までの遠近を感じる能力が明らかにされた。次に、気配感能力では、状況から気配を感じる能力が明らかにされた。

そして、・・・・・・・・・・

【研究成果】

本研究の目的が達成されたことによって、大きくわけて三つの成果を得ることができたといえる。

一つ目の成果は、本研究の目的を達成させたことによってパス指導の際の有用な知見を得ることができたことである。

まず、・・・・・・・・・・次に、・・・・・・・・・・次に、〈パスの知〉の構造、言い換えれば、パスが〈できる〉ための運動能力が明らかにされたことによって、指導者は選手に対して〈パスの知〉を習得、修正、洗練させる促発指導のための有用な手がかりを得ることができたことである。

また、学校体育において、サッカーを専門としない教師がサッカーを教えなければならない場合もある。とりわけ学級担任制が採用されている小学校では、サッカーをどのように教えればいいのか、ということに苦悩している先生もいると思われる。サッカーを専門としない先生にとって、本研究の成果が学校体育におけるサッカーのパスの指導の手引きになると考えられる。

二つ目の成果は、本研究によってサッカーの一般理論としての指導法の構築および指導教本の作成に向けて一步を踏み出したことである。本研究の目的を達成させたことによって、サッカーの一般理論の構築および指導教本の作成に向けて、本研究で明らかにされた〈パスの知〉を、その一部に位置づけることができると考えられる。

三つ目の成果は、本研究によって他の球技系のスポーツにおけるパス指導の際に有用な知見を提供することができたことである。球技スポーツという類似性に基づいて、本研究によって明らかにされた〈パスの知〉を各球技スポーツの指導場面で応用することができるといえる。

【文献】

カー：加藤久監修，岩崎龍一訳（2007）プレミア流 サッカー・コーチング．ランダムハウス講談社，p.26.

チャナディ：長沼健監修・宮川毅訳（1994）—新版—チャナディのサッカー．ベースボールマガジン社．

フッサール：浜渦辰二訳（2001）デカルト的省察．岩波文庫．

釜本邦茂（1995）攻撃サッカー 技術と練習法．成美堂出版，p.102.

金子明友（2007）身体知の構造．明和出版．

金子明友（2009）スポーツ運動学．明和出版．

金子明友（2015）運動感覚の深層．明和出版．

大淵正雄・成田十次郎著作者代表（1976）最新・サッカー指導法教本．日本体育社，p.8.